

32 白金製剤による化学療法で著効が得られた 大腸癌合併進行肝細胞癌の1例

阿部 寛幸・石川 達・窪田 智之
堀米 亮子・廣瀬 奏恵・長島 藍子
富樫 忠之・関 慶一・本間 照
吉田 俊明・石原 法子*・石塚 基成**

済生会新潟第二病院消化器内科
同 病理診断科*
白根健生病院消化器内科**

【緒言】消化器悪性腫瘍に対する化学療法はそれぞれの臓器ごとにレジメンが確立しているが、重複癌に対する化学療法はまだ確立していないのが現状である。

今回我々は、肝細胞癌及び直腸癌の重複癌症例に対して、肝動脈化学塞栓療法及びラジオ波焼灼療法、全身化学療法施行することで、肝細胞癌が制御され、直腸癌に対しても奏功した症例を経験したので報告する。

症例は80歳代、男性。2010年8月検診で便潜血陽性及び3ヶ月で体重4kg減少のため近医受診し、大腸内視鏡(CF)施行でRsに1/2周するI型大腸癌を認め、術前検査施行。腹部CTで肝右葉に径13cmの腫瘍認め、2010年9月27日当院紹介受診。腹部CTではS8を中心に14cm大の単純で低濃度、動脈相で早期濃染され、平行相でwash outされる腫瘍性病変があり、また被膜様造影を認め肝細胞癌が疑われた。直腸癌MPN0M0のcStage I, S8を中心とする径13cmの肝細胞癌T3N0M0でcStage III重複癌であり、肝細胞癌が生命予後を決定すると考えられ、肝細胞癌治療を優先し、DDP-H, Epirubicin, Miriplatinによる肝動脈化学塞栓療法(TACE)及びMass reduction目的の経皮的ラジオ波焼灼療法(RFA)を繰り返し施行し、直腸癌に対してmFOLFOX6+bevacizumabを計4コース施行した。治療開始から6ヶ月後CFでは直腸癌は消失しており、CT上もCRであった。17ヶ月現在でも大腸癌はCRで肝細胞癌も新病変認めず、病勢コントロール良好である。

【結語】肝細胞癌及び直腸癌の重複癌症例に対して、TACE, RFA及び全身化学療法施行するこ

とで、肝細胞癌が制御され、直腸癌も奏功が得られた症例を経験した。直腸癌を含めた大腸癌レジメンに使用されるoxaliplatinとDDP-Hは共に白金製剤であり、oxaliplatinはシュウ酸イオンが水分子と置換することでDNAと結合し、DDP-HはClが水分子と置換することでDNAと結合しDNAが架橋形成されることでDNAの複製、転写を阻害する。そのため、2薬剤とも理論的には同じ薬理活性作用をもつと考えられ、mFOLFOX6+bevacizumabの他に肝動注したDDP-Hが直腸癌(原発巣)の奏功に寄与した可能性が示唆された。

33 広範な肝細胞壊死をきたしたB型肝炎肝細胞癌の1例

杉田あかね・石川 達・長島 藍子
窪田 智之・阿部 寛幸・廣瀬 奏恵
富樫 忠之・関 慶一・本間 照
吉田 俊明・石原 法子*

済生会新潟第二病院消化器内科
同 病理検査科*

34 短期間に急速な腹膜播種をきたした肝細胞癌の1例

戸塚雄一郎・石川 達・阿部 寛幸
堀米 亮子・窪田 智之・長島 藍子
廣瀬 奏恵・富樫 忠之・関 慶一
本間 照・吉田 俊明・石原 法子*

済生会新潟第二病院消化器内科
同 病理検査科*

35 StarBurstXL電極(RITA Model 90)を用いたラジオ波焼灼範囲の実験的検討

石川 達・窪田 智之・堀米 亮子
阿部 寛幸・長島 藍子・廣瀬 奏恵
富樫 忠之・関 慶一・本間 照
吉田 俊明

済生会新潟第二病院消化器内科